

**109. 日本住血吸虫症肝障害における非瀰漫性
肝病理組織分布とシンチグラム**

東京都養育院付属病院 核医学放射線部
飯尾 正宏 山田 英夫 千葉 一夫
甲府市立病院 内科
井内 正彦 平賀 良彦 早川 操子
東京都老人総合研究所 第1臨床生理
木谷 健一

肝線維症・肝硬変症などは、従来いわゆる瀰漫性肝疾患として扱われ、同一例の肝内に、異なる病態の肝組織が巨視的に混在する症例の報告はほとんどない。

慢性日本住血吸虫症症例1500名に約1800回の肝スキャンを実施し、右葉欠損型の小肝を多数例にみたが、その他に極めて特異な例として、非瀰漫性の放射性医薬品の肝分布を一部の症例でみとめたので、シンチグラムならびに病理的検索を行ない報告をする。

182例に、左右両葉の生検を行ない、この中15例に両葉の肝病理組織構造が全く異なる非瀰漫性の肝線維症、肝硬変症を見出した。組織所見は、右葉に進行性の病変の存するものが多く(15例中14例)、この中右、肝硬変、左、正常のもの3例、右、肝硬変、左、線維症のもの3例、右、線維症、左、正常のもの8例、右、正常、左、線維症のもの1例であった。この中12例に肝シンチグラムを実施、11例に生検所見と一致した。肝葉単位または肝小区域大の不均等の放射性医薬品の分布をみ、しばしば space occupying lesion と誤診され、鑑別には別に報告する α -feto protein の測定、腹腔鏡所見などを不要とした。肝両葉生検を実施した残りの167例は、すべて肝左右両葉同様の瀰漫性の病理変化を示し、シンチグラム上も、放射性医薬品の不均等分布の所見はえられなかった。この群の内訳は、肝硬変症34例、肝線維症29例、正常例104例であった。

このような知見は、他の肝疾患ではほとんど例をみず慢性日本住血吸虫症による肝疾患の一部の症例の特徴と考えられ、かつ同症の肝シンチグラムの読影にさいし注意を要するので報告した。

**110. Drug-Induced Lipidosis の肝シンチ
グラムについて**

大阪府立成人病センター
中野 俊一 長谷川義尚 松岡 健造
児島淳之助 清水 伍市 乾 久朗
石上 重行

〔研究目的〕われわれは昭和45年1月より昭和47年5月までの2年5ヶ月間に144例の肝シンチグラフィーを行なったが、この中で6例の drug-induced lipidosis を経験したので本症の肝シンチグラム所見を他の肝疾患のそれと対比して報告する。

〔方法〕肝シンチグラフィーは ^{198}Au コロイド $250\mu\text{Ci}$ 注射後、島津製10F型ハニコーンコリメーターを装着したシンチスキャナー(クリスタル 3×2 吋)を用いてマルチカット-オフ方式で検査した。また、同時に arm counter (Packard 社製)を用いて ^{198}Au コロイドの血中消失速度を測定した。肝シンチグラフィーを行なった144例中、腹腔鏡、生検、手術、あるいは剖検などで肉眼的ないし病理組織学的に確診されたのは74例で、その内訳は、慢性肝炎7例、肝硬変14例、原発性肝癌20例、転移性肝癌10例、drug-induced lipidosis、6例、その他17例である。drug-induced lipidosis の診断はOH剤服用の既往、臨床症状および検査、腹腔鏡、生検材料の電顕および血清脂質の分析などの所見、成績を総合して行なった。

〔成績〕肝の右幅径は16.6cm(平均値、以下同じ)、左幅径は11.9cm、左幅径/右幅径比は0.73である。(計測は久田の方法に拠った)。これに対し慢性肝炎ではそれぞれ15.1cm、8.4cmおよび0.57、肝硬変では12.5cm、8.9cmおよび0.74である。即ち本症においては他の2群に比べて両幅径とも増大し特に左幅径のそれが顕著である。次に面積(正中線において2分した)については右は 158.7cm^2 、左は 66.8cm^2 、その比は0.42で上記と同様の傾向を示す。また本症の全例に脾影を認めた。本症の ^{198}Au コロイド血中消失速度(T $\frac{1}{2}$)の平均値は8.1分、慢性肝炎6.4分、肝硬変10.3分である。また、アミロイドーシスの1例でも本症と類似の肝シンチグラムを示した。

〔結論〕drug-induced lipidosis の肝シンチグラムは両葉腫大し、特に左葉の著明に腫大するものが多く、また全例に脾影をみとめた。